

いわゆる使用価値の捨象にかんする一考察

——故白杉教授『価値の理論』によせて——

岡崎 栄 松

- 一 ま え が き
- 二 「使用価値の捨象」にかんする白杉教授の見解
- 三 価値の実体規定にかんする白杉教授の見解
- 四 む す び

一 ま え が き

ひともしるように、故白杉庄一郎教授は経済学史・経済史・経済理論の各分野で数多くの優れた著書および論文をものされたが、本稿でとりあげようとする『価値の理論』（一九五五年、ミネルヴァ書房刊）は、はからずも教授の最後の労作となった『独占理論の研究』とともに、経済理論の分野における教授の代表作の一つをなすものといつてよい。

ところで『独占理論の研究』は、従来の通説に対抗して独占利潤の生産過程的源泉を重視・力説する立場から、

「独占的剰余価値」——それは教授によれば、「独占的競争」の諸条件のもとで特別剰余価値が固定化したものである——こそが独占利潤の基本的要素だとする一種独特な独占利潤論を積極的に展開したものと、ひろく学界から注目されることとなっている。『独占理論の研究』が多大の反響をよんだというこの点は、教授の「独占利潤」独占的剰余価値」説をとりあげた著書・論文がこれまでにもすでに多数あらわれている（たとえば遊部久藏編著『資本論』研究史、平瀬巳之吉著『独占資本主義の経済理論』、堀江保蔵『資本主義経済の発達と技術』、重田澄男『独占利潤の基本的源泉について』、越村信三郎『独占価格の形成とその限界』、木村敬男『技術革新と固定資本の巨大化』、大島雄一『いわゆる基本的経済法則についての覚書』、木岡要一郎『競争と平均利潤の法則』、宮本義男『独占分析の具体化』、杉原四郎『独占的剰余価値について』等々）こと、また、昨秋の経済理論学会第五回大会ではその共通論題「独占利潤および独占価格」の報告と討論が、主として教授の『独占理論の研究』をめぐっておこなわれたということからも、ただちに首肯しうるであろう。

他方において、白杉教授の旧著『価値の理論』は、その刊行いらい若干の批評があらわれている（たとえば大熊信行著『経済学實論』計画経済学の基礎、木岡要一郎『労働価値論をめぐる批判と反批判』、岡田純一『社会主義経済における価値法則と配分原理』、伊藤若『経済学の方法について』、城塚和夫『市場価値論について』、石原忠雄著『恐慌の経済理論』、持丸悦朗『複雑労働と簡單労働』、大内秀明『価値形態』の展開（一）など）とはいえ、『独占理論の研究』の場合ほど大きな反響を学会によびおこしたとはいえなかった。しかし、独自の・独創的な見解がうちだされている点では『価値の理論』は『独占理論の研究』に優るとも劣らないものといえることができるのであって、この点、『価値の理論』はげんにそうされているよりもっと注目され吟味されて然るべきであったと思われる。

それはともかく、『価値の理論』において白杉教授がもっとも精力的に自説を展開されているのは、(一)いわゆる

る使用価値の捨象の問題（これにはもちろん価値の実体規定の問題もふくまれる）、（二）社会的必要労働時間の概念把握の問題、（三）社会主義社会における価値法則の作用の問題にかんしてである。ところで、筆者の知る限りでは、第一の「使用価値の捨象」の問題にかんする教授の見解を正面からとりあつた論稿は、これまでのところまだ見あたらないようである。そこで本稿では、この「使用価値の捨象」の問題についての教授の所論をとりあげ、そのもつ意味内容を立ち入って検討したいと思う。いいかえれば、白杉教授は「使用価値の捨象」の問題にかんしてどのような独自の主張を展開されているか、そしてそれは教授のどのような問題意識にもとづいているか、また教授にあつては商品価値の実体規定がどのような形であたえられているか、といった諸点を明らかにすること、つまり、「使用価値の捨象」および価値の実体規定の問題をめぐる白杉教授の見解を、教授自身の所説に即して吟味・検討すること——これが、この小論におけるわれわれの主要な課題である。

二 「使用価値の捨象」にかんする白杉教授の見解

さて白杉教授は、「使用価値の捨象」の問題について論述されるまえに、まず『資本論』劈頭の商品の性格をかなり詳細に考察しておられる。そこでわれわれもまた、「使用価値の捨象」にかんする教授の見解を吟味・検討するに先だつて、いわゆる冒頭商品の性格規定の問題について教授がどのような意見を包懐しておられるかをあらかじめ見ておくことにしよう。

まず白杉教授は、マルクスおよびエンゲルスから一連の文章を引用されながら、『資本論』冒頭の商品は前資本制的な「歴史上の単純商品」ではなくして、どこまでも資本主義社会の商品でなければならず、「資本制生産の外

からあたえられるものではなくて、資本制生産の内から、その結果としてあたえられるものでなければならぬ」〔『価値の理論』三ページ〕と解される。そして、このような見地から教授は、「問題の商品を単純商品とする解釈は——我国では今日なお完全に清算されたとはいえないところがあるように見うけられるけれども——到底支持されがたいように思われる」（前掲書五ページ）として、冒頭商品の性格規定をめぐる戦前の河上・榎田論争を批判的に追跡され、さらに戦後における「榎田説の折衷的保存の例」として向坂逸郎・安部隆一・長谷部文雄の諸教授の見解を鋭く批判される。

たとえば白杉教授は、冒頭商品の単純な性格を資本主義以前に現実存在した「歴史上の単純商品」のそれによって基礎づけようとする向坂教授の見解（さしあたり同教授『経済学方法論』第三分冊、五〇―五二ページ、七九―八〇ページ参照）にたいして、つぎのように反論されている。——「資本制商品から抽出された商品の単純な性質が、歴史的に存在した単純な商品のそれに照応するところをもつということは、どこまでも承認されなければならない。そして、そのかぎり、商品分析における抽象の仕方が歴史的に方向づけられているということも、否定することのできない真実である。しかし、我々は、そのことを理由として、教授のように、『資本論』冒頭の商品に前資本制商品としての歴史的な性格をになわせるのには、なんとしても賛成できないのである」（『価値の理論』一八ページ、力点——白杉教授）。

白杉教授はまた、『資本論』冒頭の商品は「歴史上の単純商品」——これには「ノアの洪水前の商品」も含まれる——と資本主義社会の商品とを一樣に「商品」としての規定性において抽象したもの、つまり「範疇」としての「商品一般」だとする長谷部教授の解釈（たとえば同教授稿『夢みる研究』二二二）〔理論社刊』講座・資本論の解明』

第一分冊、一七二—三三ページ)を、つぎのように批判されている。「私は、冒頭の商品を『ノアの洪水前の商品』をも包摂した『商品一般』と解するのは、正しくないとと思う。それはどこまでも資本制商品なのである。勿論その商品は、第一篇においては、資本制的性格を捨象して考察される。いいかえると、それは、『ノアの洪水前の商品』にも妥当するような『商品一般』としての、性格において、考察される。しかし、だからといって、冒頭の商品がそのことによって資本制商品でなくなるわけではない。それについて定立される価値法則が商品一般については妥当するにとどまるからといって、そのことにより、冒頭の商品が商品一般となるのではない。長谷部氏の所説はこの点を明確にしていない」(『価値の理論』二〇ページ、力点——白杉教授)。

ところで、向坂・長谷部両教授への白杉教授のこうした批判的主張はまったく当を得たものといつてよい。ただし両教授にあっては、「理論的方法 (die theoretische Methode)」——上向法における諸範疇が下向ないし研究の出発点としての現実の資本主義社会から抽象されたものであり、したがって、諸範疇の上向的展開のプロセスでは——**もっとも簡単な範疇がとりあつかわれる場合にも**——つねに現実のブルジョア社会が「実在的な主体 (das reale Subjekt)」として表象に浮べられていなければならないという点が忘れられているのにたいし、白杉教授は、「冒頭の商品に前資本制商品としての歴史的な性格をになわせる」ことや、「冒頭の商品を『ノアの洪水前の商品』をも包摂した『商品一般』と解する」ことにつよく反対されながら、『資本論』冒頭の商品をどこまでも「実在的な主体」——ブルジョア社会から抽象されたものと解すべきだと主張されているからである。別言すれば、教授においては冒頭商品が、「歴史上の単純商品」でもなければ「商品一般」でもなく、いわば論理上の単純商品として、すなわち「資本制商品」からその「資本制的性格を捨象して考察され」たものとして擱まれているからであ

る。このばあい教授が、冒頭商品をもって、近代ブルジョア社会の諸関係を抽象的・一般的な規定性において表示するものと見なされ、こうしてそれを、一定の歴史的な形態規定性を担った範疇として把握されていることはいうまでもない。

要するに、白杉教授の考えでは、冒頭商品の性格規定にさいして資本主義以前のいわゆる単純商品生産を「実在的な主体」として表象することはなんとしても許されぬことであり、「問題の商品は発展しとげた資本制商品以外の何物でもない」（前掲書一五ページ）のである。そして、くりかえしていえば、冒頭商品の性格規定の問題をめぐる教授のこのような見解は、「理論的方法」——上向法にかんするマルクスの指摘（かの『経済学批判序説』における）を十分にふまえたものとして、文字どおり正鵠を得たものといふことができる。^(注)

(注) もっとも白杉教授は、「おもうに、商品の研究において、概念の順序と歴史の順序とがほぼ合致するのは、上向的叙述の始まる（『資本論』第一章）第三節以後においてである」（前掲書二一ページ、力点——白杉教授）と述べて、あたかも、上向的叙述がはじまるのは第三節からであつて第一・二節は下向のプロセスであるかのように考えておられるが、これは正しい見解とはいえないであろう。この場合には教授は、上向的叙述がかならずしも分析を排除しない点を見逃されて、分析的方法を下向の過程に固有なものとされているのであつて、ために教授は、第一・二節では現象的な交換価値から出発してその基礎あるいは本質としての価値が分析されているという事情、しかも、そこではさしあたり価値がその表現様式とは無関係にそれ自身として考察されていて、第三節にいたつてはじめて価値の必然的な現象形態としての交換価値がとりあげられるという事情からして、第一・二節が論理的展開——上向のあゆみであることを否定され、こうして上向的叙述が第三節においてはじめて開始されるかのように思惟されたものようである。しかし実際には、上向的叙述は第一節——そこでは下向の到達点たるもっとも簡単な範疇としての商品がとりあつかわれる——の初発からはじまっているのであつて、現実的・具体的なものから抽象的なものへという下向のプロセスは、マルクスがその多年にわたる研究の過程で『資本論』の執筆ないし刊行以前にすでに完了していたといふべきであらう。

なお、マルクスの上向法にかんする白杉教授のみぎの解釈は、実は、梯明秀教授のつぎのような独自の見解、すなわち「〔資本論第一章の〕第一、第二の兩節にあつては、（ヘーゲルの）『外的反省』の立場において価値の实体を自然的思惟によつて分析しているのであり、これにたいし第三節にあつては、ヘーゲルの『規定的反省』の唯物論化した立場において、価値の实体を弁証法的に自己分析するのである」(ヘーゲル哲学と資本論二七四ページ)とする見解、そして第一・二節から第三節への「立場の転換」を強調して、「『表象せられた具体的なものから、ますます稀薄な抽象的なものにとどりつき、さいごに最も單純な諸規定に到達する』という『最初の途』と、『この單純な諸規定から再び多くの諸規定と諸關係のゆたかな一総体性に到達する』という『後方への旅』とが、第一、第二兩節と第三節との差異である」(前掲書二七五ページ)とする見解から示唆を得たものである(『価値の理論』二〇―二二ページ参照)。ところで梯教授のこうした見解が、分析と総合とをいわば機械的に分離して、前者を下向の道程だけに局限しようとするものであることは、あらためていうまでもない。

以上、われわれは、冒頭商品の性格規定にかんする白杉教授の所説を簡単に跡づけてきたが、いまやわれわれは「使用価値の捨象」の問題についての白杉教授の見解を立ち入って吟味・検討することにしよう。だが、そのためには、われわれは、『価値の理論』においてはみぎの問題がどのような形で論ぜられているかを見ておくことからはじめなければならない。

ところで白杉教授はまず、交換価値はさしあたり、時および所とともにたえず変動するところの諸商品の交換比率としてあらわれるにしても、「しかし、だからといって、交換価値は全く偶然的なものであるわけではない」(前掲書三〇ページ)として、つぎのように論述される。

「ある商品、たとえば一キログラムの米は、靴下一足、一メートルの木綿、二〇センチメートルの絹、一・五キログラムの鉄、〇・三グラム金の、等々、種々さまざまの比率で交換される。だから米は単一の交換価値を有

するものではなく、多様な交換価値をもつわけである。しかるに、一足の靴下、一メートルの木綿、二〇センチメートルの絹、一・五キログラムの鉄、〇・三グラムの金などはすべて一キログラムの米の交換価値であるから、それらは相互に置換えられうる・同等な大きさの交換価値でなければならぬ。してみれば、おなじ商品の諸交換価値は同等なもの、を表現するものとして、その内実の現象形態でなければならぬ。たとえば米と鉄という二商品の交換比率がいかがようであろうとも、それはつねに或るあたえられた分量の米がどれだけの分量の鉄に等置される一つの等式、たとえば $1\text{kgの米} = 2\text{kgの鉄}$ をもって示すことができる。この等式は何を意味するか。同じ大いさの或る共通者が、二つの異なったもの、すなわち一キログラムの米と二キログラムの鉄とのうちに存在する、ということである。そうだとすれば、この両者は、本来、米でもなく鉄でもない或る第三者に等しいということになる。いいかえると、両者はいづれも、交換価値であるかぎり、この第三者に還元されるものでなければならぬ」（前掲書三〇—三二ページ、力点——白杉教授）。

かくて白杉教授は、諸商品は交換価値としては、それらがその多くを、あるいはその僅かを表示するところの「第三者」ないし「共通者」に還元されるものでなければならぬとされる。つぎに教授は、『資本論』第一章第一節から一連の文章を引用されながら、（一）交換価値の基礎としての「共通者」は諸商品の幾何学的・物理学的・化学的その他の自然的属性ではありえない——なぜなら諸商品の物體的諸属性が問題となるのは総じてただ、それらが諸商品を使用価値たらしめるかぎりにおいてであるが、他方、諸商品の交換関係をはっきりと特徴づけるものはまさにそれらの使用価値の捨象であるから——という点、（二）諸商品の使用価値を度外視すれば、それらになお残るのは無区別な抽象的・人間の労働のたんなる凝結——堆積であって、諸商品はそれらに共通なかかる

社会的実体の結晶としては価値であるという点を指摘されたのち、「このようにしてマルクスは、問題の共通者——諸商品の交換価値が還元される共通者を——労働に、正確にいうと『抽象的人間労働』に発見し、これをもって価値の実体となしている」（前掲書三三ページ）と述べられる。

つまり白杉教授は、「使用価値の捨象」を理論的基軸として「第三者」Ⅱ「共通者」を抽象的・人間的労働の結晶としての価値においてみいだすマルクスの所説を、さしあたりそのままの形で採用されるわけである。このばあい教授が、諸商品の交換関係は純粹に量的なものであるから、ほんらい異質性をもって特徴とする諸商品の使用価値は「問題の共通者」とはなりえないと考えておられることはいうまでもない。げんに教授自身、つぎのように——「価値の実体を析出するにあたって、マルクスは、交換関係においては使用価値は捨象されるとしているが、それは彼が交換関係は純粹に量的な関係であるから質的差異としての使用価値はそれに入りこむ余地がないと考えたから」だと書いておられる（前掲書三四ページ、力点——白杉教授）。

ところで、白杉教授のこれまでの所論は、交換関係における使用価値の捨象の事実にもとづいて「共通者」を抽象的・人間的労働の凝結としての価値に求めるマルクスの見地を、ほぼ忠実に再現したものといてよい。そしてそのかぎりにおいて教授が、使用価値としての商品と交換価値としての商品との排他的・対立的な関係を強調したマルクスのつぎの命題、すなわち「使用価値としては諸商品は、なによりもまず相異なる質であるが、交換価値としては、それらはただ相異なる量たりうるのみであり、かくして微塵の使用価値もふくまなう」（K. Marx, *Das Kapital, Volksausg. bsgrt. v. M. E. L. -Institut, 1955, I. Bd., S. 42*、長谷部文雄訳『資本論』、青木書店、第一部上冊、一七ページ）という命題を容認されるのは論理必然的というべきであらう。また実際、白杉教授はこの命題を、「使

「使用価値の捨象」にかんするマルクスの他の諸章句とともに、ひとたびは肯定的に引用しておられる（『価値の理論』三二二ページ参照）。ところが教授はいまや一転して、「使用価値の捨象」についての「マルクスの行論は一層深い根柢から反省しなおして見られなければならない」（前掲書三七ページ）としながら、マルクスのみぎの命題を事実上否定されるのである。

いわく、——「彼〔マルクス〕が交換関係において捨象されるとしているのは、個別的・具体的な使用価値のことでなければならぬ。けだし、使用価値は一般的・抽象的な側面を全然もたぬ単に個別的・具体的なものとは考えられないからである。なるほど、使用価値は、なんらかの種類の人間の欲望もしくは必要の対象としては、個別的・具体的なものである。しかし、いかなる種類の欲望もしくは必要の充足にやくだつにせよ、とにかく、人間にやくだつもの・有用性・一般の担い手として見れば、それは明かに一般的・抽象的なものである。それは、あたかも、労働生産物が特定の具体的にして有用な生産的労働の生産物であるとともに、他方では同等な抽象的人間労働の生産物と考えられるのと、全く同様の関係である。したがって、労働生産物は、特定の具体的にして有用な生産的労働の生産物としては個別的・具体的な使用価値であるとともに、同等な抽象的人間労働の生産物としては、一般的・抽象的な使用価値であるのでなければならぬ。こう考えてくると、交換関係したがって**交換価値を成立せしめる問題の共通者は、微塵の使用価値もふくまないといったものではなく、『無差別な人間労働の**

・すなわちその支出の形式には頓着のない人間労働力の支出の単なる凝結』であるとともに、無差別の使用価値の・すなわちいかなる種類の欲望を充足するかには頓着のない単なる有用性一般であるのでなければならぬ」

（前掲書三七二—三七八ページ、力点は白杉教授、ゴシックは引用者）

このように白杉教授は、「使用価値は一般的・抽象的な側面を全然もたぬ単に個別的・具体的なものとは考えられない」として、商品の使用価値を「一般的・抽象的な使用価値」——それは教授によれば「いかなる種類の欲望もしくは必要の充足にやくだつにせよ、とにかく人間にやくだつもの・有用性一般」である——と「個別的・具体的な使用価値」とに区別され、かつ、交換関係においては後者だけが捨象されるのであって前者の「一般的・抽象的な使用価値」は捨象されないと解される。^(注)そして、ここからして教授は、「交換価値を成立せしめる問題の共通者」は「微塵の使用価値もふくまない」わけではなく、それには「無差別な人間労働の・すなわちその支出の形式には頓着のない人間労働力の支出の単なる凝結」とともに、「いかなる種類の欲望を充足するかには頓着のない単なる有用性一般」つまり「一般的・抽象的な使用価値」もまた包含されていると主張されるのである。

(注) こうした視点から白杉教授は、ポヘーム・パウエルクの周知のマルクス批判、すなわち「商品の交換関係にとっては、商品の使用価値がとるであろう特殊な態様、つまり商品が衣食住などに役だつかどうかは、なるほど捨象されるが、使用価値一般(Gebrauchswerte überhaupt)は断じて捨象されない。後者が無条件に捨象されないということは、使用価値が存在しないところには、いうまでもなく交換価値は存在しえないということ——すなわちマルクス自身もくりかえし認めることを余儀なくされている事実——からして、すでにマルクスも察知するべきであらう」(Bohm-Bawerk, *Kapital und Kapitalisms, I. Abt.*, 1921, S. 384.) という批判にかんして、ポヘームのこのマルクス批判は「簡単にしりぞけることのできないものをもっている」とされ、また「使用価値一般」という概念の存在しうることは彼の主張しているのとおりだ」(力点——白杉教授)と述べておられる(『価値の理論』二八一—九ページ参照)。

なおロンドン・L・ミークは、ポヘーム・パウエルクによる上掲のマルクス批判に言及しながら、つぎのように書いている。「マルクスは、『共通な』あるもの』は『商品の幾何学的、化学的、あるいはその他の自然的属性』でありうるという考えを排撃している。これらの属性は、それらが商品を使用価値たらしめるかぎりでのみ、われわれの注意をひくのだ

が、しかし商品の交換価値は『使用価値の完全な捨象』を特色とすると、マルクスはのべている。この主張は、これまでしばしば誤解されてきた。たとえばポエム・パウエルは、マルクスはただ『商品の使用価値がとるであろう特殊な態様』が交換にさいして捨象されるということを論証したにすぎないのに、ここからすんで、使用価値そのものが捨象されると推論するのだと異議をのべた。これは、けっきょく、『類の捨象と、類が自身自身を表現する特殊な形態の捨象』との混同ということに帰着すると、ポエム・パウエルはのべてた。しかし実際には、マルクスはとくにここで、ポエム・パウエルの『すなわち使用価値そのものには少しも関心をもっていない』マルクスはただ、『商品の使用価値がとるであろう特殊な態様』に関心をもっていたのである（Ronald L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, 1966, pp. 160—161. 水田洋・宮本義男共訳『労働価値論史研究』二〇〇ページ、力点はミーク、ゴシックは引用者）。

ミークのこの一文のうち、われわれがゴシック体にした箇所から判断すると、彼ミークもまた、商品の使用価値を「類」としての「使用価値そのもの」＝「使用価値一般」と、「商品の使用価値がとるであろう特殊な態様」——白杉教授の言葉でいえば「個別的・具体的な使用価値」——とに区別することが可能であると考えていたものようである。しかし、いうまでもなく、ミークは白杉教授とはちがって、前者の「使用価値一般」を「問題の共通者」のなかへ入りこませるようなことはしていない。

ところで、白杉教授が「個別的・具体的な使用価値」から「一般的・抽象的な使用価値」を峻別されて、この後者を、「いかなる種類の欲望もしくは必要にやくだつにせよ、とにかく人間にやくだつもの・有用性一般」あるいは「いかなる種類の欲望を充足するかには頓着のない単なる有用性一般」と規定される場合、教授が、交換価値の基礎をなす「第三者」はなによりもまず同質的なものでなければならぬ、という点を念頭に置かれていゝることはいうまでもない。

しかし、ここでわれわれは、上掲引用文において白杉教授が、交換関係では「個別的・具体的な使用価値」だけが捨象されるのであって「一般的・抽象的な使用価値」は捨象されえないといわれるさいの「交換関係」は、

実は交換ないし交換過程にはかならないという点に注意しなければならない。つまり白杉教授は、ほんらい交換関係の次元でとりあつかわれるべき「使用価値の捨象」の問題を、交換あるいは交換過程の次元に移して考察されているわけである。いまこの点を示すものとして、われわれは教授のつぎの一文を引用しておこう。

「いかに發達せる段階の商品生産者にとつても、交換に使用しうるといふ商品の使用価値は残る。商品生産者は、商品のもつこの使用価値のゆえに、商品を生産するのである。したがって、具体的な使用価値の捨象は、商品の使用価値一般の捨象にはならない。勿論、交換に使用しうるといふ商品の使用価値は、商品の所有者に対してそれのもつ直接の——商品の物質的属性にもとづく第一次的の——使用価値ではなくて、他人に対してそれのもつ使用価値——社会的使用価値——に依存するものである。しかし、他人にとつての使用価値が具体的現実的にかなるものであるかは、いいかえると他人がそれをどう使用するかは、商品所有者の関知するところではない。商品所有者からすれば、他人がその商品になんらかの使用価値を認めてくれさえすれば、それでよいのである。しかし、なんらかの使用価値を認めてくれることは、その商品が商品でありうるための絶対不可欠の要件なのである。そして商品所有者にとり商品が交換に使用しうるといふ使用価値をもちうるのは、この社会的な使用価値一般を基礎としてである。してみれば、**交換にさいして**具体的な使用価値は捨象されるにしても、それともにも使用価値一般も捨象されるなどとはいえないのである」(『価値の理論』四三ページ、力点は白杉教授、ゴシックは引用者)。

ここで白杉教授が、「使用価値の捨象」の問題を交換あるいは交換過程のディメンジョンで考察されながら、それを商品の生産者ないし所有者の**欲望**との関連においてとりあつかうておられることは明らかである。(注)すな

わち教授は、商品生産者にとっては使用価値が交換価値の担い手としてのみ生産されるということ、したがって商品の使用価値は所有者自身の欲望とはおよそ無関係であるということをもって、「具体的な使用価値の捨象」の意味するところだとされているわけである。しかも教授は、「交換」と「交換関係」とを直接に同一視されながら、みぎのようなものとしての「具体的な使用価値の捨象」がとりもなおさず、「共通者」の探究にさいして問題となる「使用価値の捨象」なのだと解されているのである。

（注）なお、この点については『価値の理論』三五―六ページを参照すべきである。そこには、なかんずく次の文章がみだされる。「おもうにマルクスの場合、使用価値の捨象の客観的基礎は、たしかに、使用価値が直接的には個別的具体的であり、質的なものであるという点にある。しかし、**交換における商品所有者にとっての使用価値の捨象**は、この事実と無関係とはいえないであろう。ただし商品所有者にとっての直接的な使用価値の捨象が、交換の根本的な前提となっているのだからである。実際、かつて櫛田民藏氏がいったごとく、『商品の使用価値は社会生活の不可欠の条件たるに拘らず、商品の生産者にとりてはむしろ必要悪である』¹といつてよいのである」（前掲書三六ページ、力点は白杉教授、ゴシックは引用者）。

ところで、商品生産者にとっては使用価値が交換価値の担い手としてのみ問題となるということ、だから商品の使用価値はその所有者自身の欲望とはまったく無関係だということ——こうしたこと自体については、もちろん疑問の余地がない。しかしこれはただ、商品の使用価値が他人のための使用価値であり、しかも交換を前提とする他人のための使用価値であるということをいいかえたにすぎないのであって、これをもって「共通者」の析出過程で問題となる「使用価値の捨象」の含意するところだとするわけにはいかない。もともとマルクスの意味での「使用価値の捨象」は、白杉教授の考えられるように商品所有者の欲望との関連において問題にすべきもので

はなく、どこまでも諸商品の交換関係 \parallel 等置関係とかかわらせて理解すべきものである。すなわちマルクスは、交換価値の基礎をなす「共通者」の究明にあたっては、ブルジョア社会における日常的な交換現象をもっぱら諸商品の交換関係 \parallel 等置関係としての規定性において考察しているのであり、そして彼は、この交換関係は純粋に量的な関係であるがゆえに、「共通者」の探究にさいしては、異質性によって特徴づけられる諸商品の使用価値はまずもって捨象されねばならないとしたのである。また実際、白杉教授自身、さきにはこの点を正しく把握されて、「マルクスは、交換関係においては使用価値は捨象されるとしているが、それは彼が交換関係は純粋に量的な関係であるから質的差異としての使用価値はそれに入りこむ余地がないと考えたから」だと述べられたのであった。しかるに、いまや白杉教授は、「使用価値の捨象」の問題を交換ないし交換過程の次元での問題として考察されながら、「具体的な使用価値の捨象」という教授独自の概念を提示されるのである。だが教授のこの概念は、それが商品の使用価値にたいする所有者自身の欲望の「捨象」を意味するにすぎないかぎり、マルクスの意味における「使用価値の捨象」とは根本的に異なるものだといわざるをえない。

それはともかく、白杉教授の上掲引用文にかんしては、さらになお、われわれはつぎの点を問題にしなければならぬ。すなわち、白杉教授は、「交換に使用しようという商品の使用価値」は「商品の所有者に対してそれのもつ直接の——商品の物質的屬性にもとづく第一次的の——使用価値ではなくて、他人に対してそれのもつ使用価値——社会的使用価値——に依存する」とされ、さらにすんで教授は、「他人にとっての使用価値が具体的に現実的にかかぬものであるか」は商品所有者にとってはどうでもよく、「商品所有者からすれば、他人がその商品になんらかの使用価値を認めてくれさえすれば、それでよい」として、商品の社会的使用価値を「社会的

な使用価値一般」に還元されている点が、それである。

なるほど、「交換に使用しうるといふ商品の使用価値」つまり交換手段としての商品の使用価値が、他人のための使用価値、社会的使用価値に依存することは教授のいわれるとおりである。しかし教授が、「他人にとっての使用価値が具体的現実的にかなるものであるか」は商品所有者の関知しないところだとして「社会的な使用価値一般」について語っておられるのはどうであろうか。たしかに、「商品所有者からすれば、他人がその商品になんらかの使用価値を認めてくれさえすれば、それでよい」のではあるが、しかし、他人がその商品になんらかの使用価値をみとめてくれるためには、その商品はなによりもまず、**特定の物体的諸属性をそなえた有用物**として存在していなければならない。というのは、交換過程に登場する商品所有者たちは欲望一般の持主としてではなく、**特殊な具体的欲望の担い手**として対応しあうのだからである。ところが白杉教授は、「商品の物質的属性にもとづく」使用価値を、「商品の所有者に対してそれのもつ直接の」使用価値、つまり**所有者自身のための使用価値**だけに限定して、他人のための使用価値、社会的使用価値はあたかも「商品の物質的属性」とは無関係でもあるかのように論述せられ、こうして商品の社会的使用価値を「社会的な使用価値一般」に解消されるのである。

しかも白杉教授は、かようにして商品の社会的使用価値を「社会的な使用価値一般」に解消されたうえで、「商品所有者にとり商品が交換に使用しうるといふ使用価値をもちうるのは、この社会的な使用価値一般を基礎としてである」（前出）と主張される。けれども実際には、商品がその所有者にとって「交換に使用しうるといふ使用価値」をもつことができるのは、ほかならぬ社会的使用価値そのものを基礎としてであって、教授のいわれ

るように「社会的な使用価値一般」を基礎としてではありえない。なぜなら、商品の物體的諸属性から切断されたものとしての「社会的な使用価値一般」にたいしては、いわば人間くさい欲望の持主である他人 \neq 非所有者はなんの興味もおこさないからである。

だが白杉教授自身は、交換手段だという商品の使用価値が基礎とするのは「社会的な使用価値一般」であると考えられるのであり、かつ、ここからして教授は、「具体的な使用価値の捨象」をそのまま「使用価値一般」の捨象」と同一視することによく反対されながら、「交換にさいして具体的使用価値は捨象されるにしても、それとともに使用価値一般も捨象されるなどとはいえない」（前出）と力説されるのである。してみれば、教授によって「交換にさいして」捨象されずに残るとされる「使用価値一般」が、「社会的な使用価値一般」と同じように、商品体の諸属性からまったく切りはなされたものにすぎないことはおのずから明白であろう。^(注)

(注) この点は、白杉教授がつぎのように述べておられるところからも知られるであろう。——「商品はすべてその所有者にとつてはなんら直接的な使用価値をもつものではない。商品所有者にとつては、それはただ、それが直接的には他人にとつての使用価値であるということにもとづいて、『交換価値の担い手であり、したがってまた交換手段であるという使用価値』(Gebrauchswert, Träger von Tauschwert und so Tauschmittel zu sein)をもつにとどまる。商品のもつこの種の使用価値は、**いうまでもなく、商品の物質的屬性に依拠するものではない**」(前掲書一七八ページ、力点は白杉教授、ゴシツクは引用者)。

もつとも白杉教授は、商品の使用価値が商品体の自然的な諸属性によって制約されていることを全面的に否定されるわけではない。げんに教授は「使用価値」概念の規定にさいしては、「使用価値とは有用性をもつたものとして見られた物のことである。したがって、鉄、小麦、ダイヤモンド等々のごとき**商品体そのものが使用価値である**」(前掲書二二二ページ、ゴシツク——引用者)とされている。教授はまた、自己の「使用価値」概念が効用学派のそれと異なることを指摘されながら、つぎのようにも書いておられる。——「安部(隆一)教授によれば、使用価値の本質を有用性においてではなく、その物體的

性格において確認しておくことは、労働価値説を主観価値説からの攻撃に対して守る所以のようであるが、大丈夫、労働価値説はそんな危ぶなかしげなものではない。それに、使用価値の本質を有用性にありと見ることは、使用価値の客観的物的性格を否定して、効用学派の使用価値概念に接近してゆくことになるわけのものではない。有用性とは、マルクスの用語においては、人間の欲望充足にやくだつ物の属性にはかならず、効用学派のいわゆる効用とは異なるからである」（前掲書二三ページ）。

このように白杉教授は、「使用価値」の概念規定にさいしては「商品体そのものが使用価値である」として「使用価値の客観的物的性格」をはっきりと認めておられるのであって、この点では教授の「使用価値」概念が効用学派のそれと異なっていることはたしかな事実であるといつてよい。しかし教授にあっては、「使用価値の客観的物的性格」がたんに**所有者自身のための使用価値**つまり「具体的な使用価値」だけに局限されていて、いわゆる「具体的な使用価値の捨象」とともに商品の使用価値は商品体の諸属性とはおよそ無縁なものに転化するものとされている。すなわち、教授が「社会的な使用価値一般」や「使用価値一般」について語られる場合には、教授は、「商品体そのものが使用価値である」ことを忘れられて、實際上、「使用価値の客観的物的性格」を否定されているのである。のみならず白杉教授が、「使用価値」概念の規定にあたって安部隆一教授の「使用価値Ⅱ物」説——それは「使用価値の客観的物的性格」をあまりにも一面的に前面に押し出したものであったが——をとくにとりあげられて、これを一つの「**独断**」だとされたながら、「使用価値は本源的には物を離れてはありえないが、しかし、その本質はどこまでも有用性にあるのであって、物にあるのではない」（前掲書二三三ページ、**方点**——白杉教授）と強調されているのは、やがて教授が、商品の物的諸属性から隔絶されたものとしての「社会的な使用価値一般」および「使用価値一般」を誘導するための、いわば伏線の意味をもっていたかと思われるのである。

さて、白杉教授にあっては「交換」と「交換関係」とが直接に同一視されているのだから、みぎの「使用価値一般」が、さきに教授によって「交換関係」において捨象されえないとされた「**一般的・抽象的な使用価値**」と同じものであることはいうまでもない。そこで、われわれはつぎのようにならう。——白杉教授の「**一般的・抽象的な使用価値**」——「使用価値一般」なるものは、それが「社会的な使用価値一般」に基礎づけら

れている以上、商品所有者たちの現実の具体的欲望をたんなる欲望一般に解消することによってつくりだされた概念であり、この意味においてそれはたんに頭のなかで考えられた純観念的なもの・非現実的なものにすぎない。^(注1)と。実際、こうした点では白杉教授の「使用価値一般」はポエームその他の限界効用学派のそれとほとんど異ならないといつても過言ではないであろう。^(注2)ここでわれわれは、教授がポエームによる「使用価値一般」概念の提唱を支持されて、「使用価値一般」という概念の存在しうることは彼の主張しているとおりでと考える」と言明されていたことを想起すべきである。

(注1) 宇野弘藏教授は、その労作『価値論』においてつぎのように述べておられる。……「例えば商品リンネルの所有者にとつては、リンネルは価値の担ひ手としてあるに過ぎないが、商品小麦を以てリンネルと交換せんとする者にとつては、リンネルは正にリンネルなる使用価値としてあるわけであつて、その使用価値は捨象されるわけにはゆかない。リンネルの所有者にとつても、それを小麦と交換するといふ場合には、反対に小麦の使用価値は捨象されるわけにはゆかない。商品の交換では、使用価値の捨象は、さういふ形で商品の所有者にとつてあらはれるのであつて、逆に交換の相手の商品の使用価値は捨象されるどころではない。之をどちらも使用価値一般に捨象するとしたら何のために交換されるのか目標がなくなつて来る」(『価値論』七九—八〇ページ、ゴシック——引用者)。

宇野教授のみぎの一文は、直接にはポエームの「使用価値一般」概念の非現実性を批判したものであるが、白杉教授もまた、商品所有者たちの現実の欲望をたんなる欲望一般に解消されて「使用価値一般」概念を提示されるかぎりで、宇野教授のみぎのポエーム批判は白杉教授の所説にもそのまま妥当するものといえるであろう。なお、この点については大内秀明

『価値形態』の展開(一) (明治学院大学『経済研究』第一三号、一一六—一七ページ) 参照。

(注2) 白杉教授は、「労働の具体的有用性の捨象が認められるのならば、その裏側として、有用性の具体的性格の捨象もまた認められなければならない」(『価値の理論』四七—ページ、力点——白杉教授) と書いておられるが、教授のこの一文を、わが国での効用学派の一人である土方成美氏のつぎの一文——「労働は個々の特殊形態を無視して抽象的に一般的に考へることが出来る」と云ふならば、同じく使用価値でも特殊な自然形態を無視して抽象的に一般的に使用価値を考へることが出

来るではないか」（『マルクス価値論の排撃』五九ページ）という一文と対比するとき、われわれはこの二つの文章における主張内容の類似性に思わず瞠目せざるをえないであろう。

とはいえ、われわれは白杉教授の「使用価値一般」概念をもって、すべての点で効用学派のそれと同じものだとするわけにはゆかないのであって、この点はやがて行論のうちに明らかとなるであろう。

こうしてわれわれは、「使用価値の捨象」にかんする白杉教授の独自の見解、すなわち「交換関係」（これは教授にあっては「交換」と同義語であるが）において捨象されるのは「個別的・具体的な使用価値」だけであって「一般的・抽象的な使用価値」Ⅱ「使用価値一般」は捨象されえないとする見解は、第一に、がんらい交換関係の量的性格とかかわらせて理解すべき「使用価値の捨象」の問題を交換過程のデイメンジョンに移して考察している点で、しかも第二に、交換過程における非所有者Ⅱ他人の特殊な具体的な欲望をたんなる欲望一般に解消している点で、とうてい支持しがたいものといわざるをえない。

三 価値の実体規定にかんする白杉教授の見解

前節で見たように、白杉教授は、「交換関係」においては「個別的・具体的な使用価値」だけが捨象されるのであって「一般的・抽象的な使用価値」Ⅱ「使用価値一般」は捨象されえないとしながら、「交換価値を成立せしめる問題の共通者」は「微塵の使用価値もふくまない」といったものでなく、それには「無差別な人間労働の・すなわちその支出の形式には頓着のない人間労働力の支出の単なる凝結」とともに、「いかなる種類の欲望を充足するかには頓着のない単なる有用性一般」つまり「使用価値一般」もふくまれていなければならないと主張されるのであるが、では、いったいなぜ教授は「使用価値の捨象」の問題についてこのような独自の見解を展開された

のであろうか。われわれはすすんでこの間の事情を検討することにしよう。というのは、そのことによつてわれわれは、白杉教授の「使用価値一般」概念がポエムその他の限界効用学派のそれとどの点で異なっているか、商品価値の実体規定にかんする教授の見解はいったいどのようなものであるか、といった諸点をも明らかにするであらうからである。

さて白杉教授は、ケムブリッジ学派の始祖マーシャルが、ほんらい価値論によつて説明されるべき貨幣を経済学の出発点において無媒介的に前提している点を批判されながら、つぎのように述べておられる。——「経済学にしてこのように貨幣を前提することのできるものであるならば、価値論はもはや必要ではなくなる。勿論、マーシャルが価値論を無用としたなどというのではない。しかし、彼の主観的な意図や志向の如何にかかわらず、このような立場からは本来の価値論は到底期待されうべくもないということだけはいえる。彼は、しばしば、効用価値説と労働価値説とを綜合したといわれる。しかし、彼は価格論の局面において両説を単に折衷したとどまるのであって、**本来の価値論の局面において両説を真実に綜合したのではなかった。**しかも、彼の折衷的な価格理論をささえているのは、本質的には、……効用価値説なのである」(『価値の理論』一一二ページ、ゴシック引用者)。

この一文からわれわれは、価値論の分野における白杉教授の基本的な問題意識が、労働価値説と効用価値説とを「真実」の意味において「綜合」することにあつたという点を知ることができる。教授の問題意識の焦点がまさにここにあつたことを示す文章は『価値の理論』の随所にみられるところであつて、たとえば教授はつぎのようにも論述しておられる。

「社会的欲望が購買力によって規定されるのは、いうまでもない。しかし、購買力があたえられさえすれば、それから一義的に社会的欲望が定まってくるかという点、けっしてそうではない。購買力を何の購買にあてるかは、購買力の問題ではなくて、欲望そのものの問題であるからである。したがって、社会的欲望を決定するためには、社会的欲望そのものの分析が必要となってくるのである。そして、この分析に対しては、主観価値説の説くところが参考になるのであり、そういう形で主観価値説は労働価値説に止揚されるのである。念のために一言しておく点、ここに効用価値説を労働価値説に止揚するというのは、両者を折衷しようとするような努力を意味するのではない。そのような努力は、マーシャルおよびその他の折衷論者の場合に明かであるごとく、畢竟、効用価値説を基礎にして労働価値説を換骨脱胎するという点に帰着する。なお、効用説と費用説との両立を主張しながら、『労働を価値の原因とするという意味で費用説を説く者があれば、それは当然限界効用説とは相容れない』と主張する人があるけれども（小泉信三『マルクス死後五十年』、角川文庫版、一八七頁）、私はそういう人たちのように両説を効用説の基礎上に折衷しようなどとするものではなくて、くりかえしいうが、労働価値説のなかへ限界効用説を止揚しようとするものである」（前掲書九三―四ページ、力点は白杉教授、ゴシックは引用者）。

要するに、マーシャルその他の折衷論者の場合のように「両説を効用説の基礎上に折衷しよう」とするのではなくて、効用価値説にたいする労働価値説の優越性をはっきりと認めながら、「労働価値説のなかへ限界効用説を止揚しよう」と試みる「こと」——ここに、価値論における白杉教授の基本的な問題意識があったわけである。そして（注）さきに教授が、ボエームの提唱した「使用価値一般」概念を支持されて、かの「問題の共通者」にあえて「使用価値一般」を包含させられたのも、実は、労働価値説Ⅱマルクス価値論のなかへ効用価値説を「止揚」せんとす

る教授の試みのあらわれにほかならなかったのである。つまり、「使用価値の捨象」の問題にかんする教授の独自の主張は、労働価値説と効用価値説との「真実」の「綜合」という教授特有の問題意識にもとづいていたわけである。

(注) 価値論の分野における白杉教授のこうした問題意識そのものは、経済学全般にたいする教授のつぎのような考え方に由来しているといつてよい。「マルクスによって創始された社会主義経済学は、歴史的には、いうまでもなく、いわゆる近代経済学に先行するものであるけれども、理論的には、資本主義を超えた立場にたつものとして、資本主義の立場にたつその後の経済学を包みこみうるの可能性をもつたものでもある。してみれば、経済学の歴史的発展の全成果は、畢竟、マルクスを創始者として現在その真理性が世界的に実証されつつある社会主義経済学に包摂されうる」(前掲書、序文、二ページ、力点——白杉教授)。

ところで白杉教授は、「使用価値一般」がそれ自体で「価値」の説明原理をなすかのように考えるポエーム・バウエルクにたいして、「ポエームの誤まりは、使用価値一般という概念の可能性を主張しているところにあるのではなくて、それから直接に、価値が導き出されうるかのように主張しているところにある」(前掲書四七ページ、力点——白杉教授)と批判され、さらにまた、「私は、ポエームのように価値を直接に使用価値の側から導きださるなどと考えるものではない」(前掲書三九ページ)とも述べておられる。すなわち白杉教授は、ポエーム・バウエルクが、「効用」による価値規定のためにはただ「効用」を「使用価値一般」に還元しさえすればよいとして、「価値」を直接に「使用価値一般」から導出しようとするにたいして反対されるわけである。教授の考えでは、「使用価値一般」はそれ自身のうちに「客観的な量量の原理」をもつものではないのであって、それは労働によつて実体的に基礎づけられるときのみ「価値」の説明原理となりうるのである。こう考えられて教授は、その

「使用価値一般」概念をマルクスの「抽象的・人間的労働」によって実体的に基礎づけようと試みておられる。たとえば教授が、「労働生産物は、特定の具体的にして有用な生産的労働の生産物としては個別的・具体的な使用価値であるとともに、**同等な抽象的人間労働の生産物としては一般的・抽象的な使用価値である**のでなければならぬ」(前出、本誌一〇六ページ参照、ゴシック——引用者)とされる場合がそうである。このばあい教授が、交換価値の基礎をなす「第三者」はなによりもまず同質的なものでなければならぬこと、しかし異質的なもの同質性への還元のためには、たんにポエーム流の「使用価値一般」概念を提示するだけでは不十分であることを念頭に置かれていることはいうまでもない。

(注) 事実、白杉教授は高田保馬氏——「交換に於て支配的であるものは、買手の地位であり、態度である」との立場から、「すべての使用価値は具体的なる有用性の内容に於てそれぞれ異なるものがあるけれども、欲望充足を与ふる性質、即ち効用に於ては同質のものである……」。此効用は……量的のものである。……交換せらるる二商品に於て共通なる同量のものがあるとすれば、それは使用価値である」とする高田氏の効用学派的主張(『労働価値説の吟味』五四—六ページ参照)にたいして、つぎのようにいつておられる。「交換が単に生産者したがって売手の立場からのみ見らるべきでないことは、論をまたない。しかし、それを単に需要者すなわち買手の立場からのみ見るのは、同様に——いならぬ——一面的である。より以上に、というのは、このような立場からは**客観的な量化的原理**が出てこないからである」(『価値の理論』三五ページ、力点は白杉教授、ゴシックは引用者)。

これらの文言をもってすれば、白杉教授が、「使用価値一般」そのものには「客観的な量化的原理」がないと思惟されていたことはまったく明らかであろう。

なお伊藤岩氏は、その論文『経済学の方法について』(新潟大学法経論集)第九卷第三・四合併号所収)のなかで、「勿論商品は異質的であれ、使用価値を持つといういみでは共通性を持つ」として白杉教授の「使用価値一般」概念を支持されているが、その伊藤氏も、『一般的使用価値』或は『単なる有用性一般』という概念は、……交換価値における等置の客

観的基礎である量的規定性を持ちうるものではない」という点、あるいは「使用価値一般」が客観的な量的等置の基礎とはなりうるものではない」という点は、これをみとめておられる（前掲誌二三八ページ、二四〇ページ参照）。

したがって、われわれはつぎのようにいうことができよう。——ポエームその他の効用学派にあっては、「使用価値一般」がそれ自体として「価値」の説明原理をなすかのように考えられていて、ために、その「使用価値一般」概念が労働とはおよそ無縁なものと見なされているの^(注1)にたいして、白杉教授は、労働価値説と効用価値説とを「真実」の意味で「総合」することに問題意識の焦点を据えながら、それ自体としての「使用価値一般」は「客観的な量化の原理」をもたないもの^(注2)として、その「使用価値一般」概念を積極的に労働に、しかもマルクスの「抽象的・人間的労働」に基礎づけておられる。と。そしてこの点に、われわれは白杉教授の「使用価値一般」概念とポエームその他の限界効用学派のそれとの大きなちがいをみるべきであろう。また、ここにおいてわれわれは、以前に教授がその価値論の展開にあたって、「使用価値の捨象」にかんするマルクスの所説をさしずめそのままの形で容認されて、「マルクスは、問題の共通者——諸商品の交換価値が還元される共通者を——労働に、正確にいうと『抽象的人間労働』に発見し、これをもって価値の実体となしている」と述べられたのも、一つには、「使用価値一般」を抽象的・人間的労働に基礎づけることによって「客観的な量化の原理」をうちたて、こうして「労働価値説のなかへ限界効用説を止揚しよう」という教授固有の問題意識にもとづいていたことを知るのである。

(注1) 周知のように、ポエームはかかる見地からマルクスをつぎのように批判したのであった。——「彼〔マルクス〕は交換価値の実体にかんする彼の研究の範囲を、はじめから『商品』に限定する。そしてそのさい、彼はこの概念を必ずしも入念に規定することなしに、いずれにせよ『財』よりも狭く解し、自然の賜物に対立する労働生産物に限っている。けれども

いわゆる使用価値の捨象にかんする一考察（岡崎）

いまやつぎのことが明白である。すなわち、もし現実に交換が『等しい大いさの共通者』の存在を前提する同等化を意味するとしても、この共通者は交換に入りこむすべての財に——ひとり労働生産物ばかりでなく、土地や立木や水力や炭田や石山や油田や鉱泉や金坑などのような自然の賜物にも——探究し発見されねばならない。交換価値の基礎によこたわる共通者の探究にさいして、労働生産物ではないが交換価値をもつ財を排除することは、「方法上の死罪である」（Böhm-Bawerk, *id. llo.*, SS. 380—381.）

白杉教授は、ポエームのみぎのマルクス批判を「見当はずれ」だとして、つぎのように反論されている。——「労働価値説は、けつして自然の賜物が交換価値をもたないなどと考えるものではない。ただ、その交換価値は、人間経済の本質からして、派生的だと考ふるまでである。実際、日常の我々の生活をささえている大量の商品が労働の生産物にはかならない事実を確認するならば、労働生産物以外の商品は派生的なものであることが知られるであろう。それらの非労働生産物が労働生産物に影響をあたえることがあるとしても、分析はまず本源的な労働生産物から始められなければならないのである」（『価値の理論』三九—四〇ページ、力点——白杉教授）。

ポエームにたいする白杉教授のこの批判的主張は、けだし、文字どおりの射たものというべきであろう。

（注2）なお白杉教授はこのような視角から、その「財」概念をも積極的に労働と結びつけておられる。——「使用価値であるという商品体の性格は、商品体の使用上の諸属性を獲得するために人間が多く労働を要するか、僅かの労働しか要しないかということにかかわるものではない。しかし、ほとんどすべての使用価値は、人間の労働によって獲得されるものである。そして、人間労働の所産としての使用価値が財である。マルクスは使用価値と財とを同一視しているようであるけれども、労働の生産物としての使用価値を財と規定した方が、行論上適当であり正確であるように考えられる」（前掲書二三四—四ページ、力点——白杉教授）。

このように白杉教授は、その「財」概念を意図的に労働生産物に限定されながら、「財」とは「人間労働の所産としての使用価値」あるいは「労働の生産物としての使用価値」だと規定されるのであるが、この点、「共通者」の探究にあたって考察の対象を労働生産物だけに局限したマルクスにたいし語気をつよめて批難したポエームとはまったく対照的である。

さて、みぎに見たように白杉教授は、効用学派の場合とはちがって、その「使用価値一般」概念をマルクスの

「抽象的・人間的労働」によって実体的に基礎づけようと企てられるのであるが、そうだとすれば教授が、かかる実体的基礎をもつ（と教授の考えられる）「使用価値一般」をマルクスの「価値」範疇とそのまま同一視されるであろうことは容易に推察しうるところであろう。また事実、教授は、「財という具体的な経済価値の一般的抽象的な側面が、その意味で抽象的な経済価値（つまり「使用価値一般」）が、マルクスのいわゆる価値にほかならない」（前掲書三八ページ）と書いておられる。すなわち教授は、教授によって抽象的・人間的労働に基礎づけられた「使用価値一般」が、とりもなおさず「マルクスのいわゆる価値」だとされるわけである。

しかしマルクスの「価値」範疇は、たとえば『経済学批判』において彼が、「すべての商品を労働時間に分解することは、すべての有機体を気体に分解することよりもより大きな抽象ではないが、しかしまた同時にそれよりも実在性の少ない抽象でもない」（K. Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, Volktausg. 8sgt. v. M. -E.-I.-Institut, 1951, S. 23. 宇高基輔訳『経済学批判』、日本評論社、三五ページ）と述べていることから知られるように、**一定の客観的事実を基礎として抽象されたものである**。すなわちマルクスは、ブルジョア社会では使用価値を異にする無数の諸商品⇨諸労働生産物が一定の量的比率において相互に交換され——もちろん実際には貨幣を媒介にしてではあるが——、かくして**現実に等置されている**という客観的事実を基礎としながら、この客観的事実を諸商品の交換関係⇨等置関係としての規定性において分析することにより、「共通者」を無区別な抽象的・人間的労働の結晶としての価値において論定したのであった。^(註)このばあい諸商品の交換関係における**使用価値の捨象**の事実が、彼マルクスの「価値」範疇析出のための理論的枢軸をなしていたことはいまでもない。とすれば、

白杉教授——使用価値と交換価値との排他的・対立的な関係を強調したマルクスの前掲の命題（本誌一〇五ページ

参照）を否認しながら、「使用価値の捨象」の問題について一種独特な所論を展開された白杉教授にとっては、その「使用価値一般」概念を抽象的・人間的労働によって基礎づけたうえで、それをマルクスの「価値」範疇と同一視することは、とうてい許されない事柄だといわなければならない。

（注）ヴェ・イ・レーニンはその論文『カール・マルクス』においてこの点を強調しながら、つぎのように書いている。

「交換価値（またはたんに価値）は、まずもって、ある種類の使用価値の一定数が他の種類の使用価値の一定数と交換される割合、比率である。日々の経験が示すところでは、何百万件、何十億件というこのような交換が、多種多様な、たがいにまったく比較しようのない、ありとあらゆる使用価値をたえずたがいに等しいものとしている。では、特定の社会関係の体制のなかでたえずたがいに等しいとされているこれらの種々さまざまな物のあいだには、どういう共通点があるのか？

それらに共通なのは、それらが労働生産物だということである。人間は、生産物を交換することによって、多種多様な労働またがいに等置しているのである。商品生産は、個別的な生産者たちがさまざまな生産物をつくり（社会的分業）、そしてこれらの生産物のすべてが交換のさいに等置される、そういった社会関係の体制である。したがって、すべての商品のなかに存在する共通なものとは、特定の生産部門の具体的労働ではなく、なにか一つの種類の労働ではなくて、抽象的・人間的労働、人間的労働一般である。すべての商品の価値の総和にあらわされるある社会の総労働力は、一個同一の人間労働力である。無数の交換の事実がこのことを証明している」（B. H. Jellin, *Communist, Kizhane verstepnoe*, 1950, tom 21, cyp. 43—44. 『レーニン全集』大月書店、第二巻、四八ページ。力点はレーニン、ゴシツクは引用者）。

それはともかく、もし白杉教授の考えられるように、抽象的・人間的労働によって基礎づけられた「使用価値一般」がそのまま「価値」であるとすれば、この場合には、交換価値の基礎としての「共通者」は「価値」——「使用価値一般」——それはマルクスの「抽象的・人間的労働」を主体とする——だということになるであろう。

だがこれは、「交換価値を成立せしめる問題の共通者は………」『無差別な人間労働の・すなわちその支出の形式には頓着のない人間労働力の支出の単なる凝結』であるとともに、無差別の使用価値の・すなわちいかなる種類

の欲望を充足するかには頓着のない単なる有用性一般であるのでなければならぬ」(前出、ゴシック——引用者)とする教授自身の見解と直接に矛盾するものである。というのは、この見解にあつては「問題の共通者」が、「価値」||「使用価値一般」そのものではなく、**一方では**「その支出の形式には頓着のない人間労働力の支出の単なる凝結」||「価値」に、**他方では**、「いかなる種類の欲望を充足するかには頓着のない単なる有用性一般」つまり「使用価値一般」に求められているからである。

ところで白杉教授は、「一般的抽象的に有用な人間労働」という教授独自の概念をつくりだされて、つぎのように述べておられる。

「商品が価値をもつのは、それがなんらかの意味において人間に有用であるからであり、かつなんらかの種類の労働がそのなかにふくまれているからである。一言でいうと、それがなんらかの意味において——すなわち個別・具体的にはなく、一般的・抽象的に——有用な人間労働の生産物であるからである。しかれば、その価値の大きさはいかにして測定されるか。それにふくまれている価値を形成する実体、すなわち**一般的抽象的に有用な人間労働**の分量によってである。価値を形成する実体たる一般的抽象的に有用な人間労働は、それ自体量である。けだし、裁縫および織布が具体的な使用価値たる上衣およびリンネルの形成要素であるのは、ほかではなく、それらの労働の相異なつた質によってであるが、それらの労働が上衣やリンネルの価値の実体であるのは、ただそれらの労働の特殊な質が捨象され、双方が同等の質すなわち人間労働という質を有するかぎりにおいてであるからである。いいかえると、具体的な使用価値に関しては商品にふくまれている労働は質的にのみ意義をもつが、価値の大きさに関しては、それはすでに質のどんづまりたる人間労働に還元されているので、量的にのみ意義を

もち、前の場合には労働の仕方と対象が問題であるのに対して、後の場合には労働の分量すなわちその時間的継続が問題であるからである」（『価値の理論』四一ページ、丸点は白杉教授、ヨシツクは引用者）。

このように白杉教授は、「商品が価値をもつのは、それがなんらかの意味において人間に有用であるからであり、かつなんらかの種類の労働がそのなかにふくまれているからである」とされながら、「一般的抽象的に有用な人間労働」という独特な用語を創作されて、それが「価値を形成する実体」だと主張されるのであるが、ここにいわゆる「価値」が、実際にはかの「使用価値一般」にほかならないことは、みぎの一文を一読しただけでただちに明らかであろう。つまり、この場合には、教授は「使用価値一般」の**実体的基礎**を、「一般的抽象的に有用な人間労働」あるいは「なんらかの意味において」——すなわち**個別的・具体的**にではなく、**一般的・抽象的に**——有用な人間労働」に求められているわけである。これは、「使用価値一般」を規定して「いかなる種類の欲望もしくは必要の充足にやくだつにせよ、とにかく人間にやくだつもの・有用性一般」とされる教授としては、**首尾一貫した態度**だといってよい。しかし、ここで教授によって「使用価値一般」Ⅱ「価値」の**実体**とされている「一般的抽象的に有用な人間労働」は、**たんに頭のなかで案出された非現実的なもの**にすぎないのであって、だからこそ教授は、「一般的抽象的に有用な人間労働は、それ自体量である」とされながらも、この命題の**実際の論証**にあたっては、マルクスの「還元」の論理——「質のどんづまりたる人間労働」への「還元」の論理を、ほとんどそのままの形で採用せざるをえなかったのである。

要するに白杉教授は、「使用価値一般」と「価値」とを**事実上、同義語と解**されながら、「使用価値一般」それ自身には「客観的な量化の原理」がないとの見地から、その「使用価値一般」**概念の実体的基礎**を、あるとき

はマルクスの「抽象的・人間的労働」に、あるときは「一般的抽象的に有用な人間労働」に求められるのであるが、しかし教授はさらにすすんで、この二つの実体的基礎をいわば融合させようと企てておられる。げんに教授は、いわゆる労働の二重性を定式化するにさいして、こう論述されている。——「却説、要するに、すべての労働は一方では、特殊な・目的を規定された形態での人間労働力の支出であって、このような具体的有用労働という属性においては具体的な使用価値を、したがって具体的な経済価値を生産する。具体的な使用価値を人間労働の生産物として把握したものが、財すなわち具体的な経済価値である。しかし同時に、すべての労働は他方では、**一般的な・抽象的に人間の必要に應ずることを目的とした・同質的な形態における人間労働力の支出**であって、このような抽象的人間労働という属性においては抽象的な使用価値の創造にかかわるものとして、抽象的な経済価値を、簡単にいえば**価値を形成する**」(前掲書五四ページ、力点は白杉教授、ゴシックは引用者)。

ここで白杉教授が、「一般的な・……同質的な形態における人間労働力の支出」つまりマルクスの「抽象的・人間的労働」と、「抽象的に人間の必要に應ずることを目的とした……人間労働力の支出」すなわち教授特有の「一般的抽象的に有用な人間労働」とを融合させられながら、かかるものとしての「労働」をもって「使用価値一般」＝「価値」——あるいは教授自身の造語でいえば「抽象的な経済価値」——の実体的基礎と見なしておられることは疑問の余地がないであろう。しかし実際には、これまでの検討から明らかなように、マルクスの「抽象的・人間的労働」と教授のいわゆる「一般的抽象的に有用な人間労働」とは根本的に異なるものであって、この両者を融合させようとする教授の企ては、もともと実現不可能な性質のものだといわざるをえない。

白杉教授の「使用価値一般」概念は、すでに前節でみたように、(一)ほんらい交換関係の量的性格とかかわらせて考察すべき「使用価値の捨象」の問題を交換過程の局面においてとりあつかうことにより、しかも(二)交換過程における商品所有者たちの欲望をたんなる欲望一般に解消することによって、純粹に観念的につくりだされたものとして、所詮、非実体的なものでしかありえないのである。^(注)

(注) 白杉教授自身、こうした点を感じたことであろう、教授は「使用価値一般」の非実体性を一応みとめられたうえで、こんどはそれをマルクスの「抽象的・人間の労働」と連結することによって「客観的な量化の原理」をうちたてようとして企図されている。——「効用の比較と選択は、我々の経済生活において否定することのできない経験的事実である……」。そして、それを基礎とすることにより、使用価値一般が実は抽象的人間労働のいわば裏面として、これと同時に成立しているのである。いいかえると、**使用価値一般の成立する現実的社会的根柢は、抽象的人間労働のその裏面として存在しているのである**」(前掲書四四ページ、ゴシック——引用者)。

ところで白杉教授は、「価値の本質を明かにするにあたって述べたごとく、価値は一方では抽象的人間労働の結晶体であると同時に、他方では使用価値一般として規定されうる側面をもつ」(前掲書一七九ページ)といっておられる。これはいうまでもなく、まさに教授が、「問題の共通者」には、「その支出の形式には頓着のない人間労働力の支出の単なる凝結」とともに、「いかなる種類の欲望を充足するかには頓着のない単なる有用性一般」としての「使用価値一般」もふくまれていなければならないと力説されたのと対応する立言であるが、教授がみぎのようにいわれるさいの「使用価値一般」が、いかなる労働の裏づけもない非実体的なものでしかないことはまったく明白であろう。しかも教授はかかるものとしての「使用価値一般」を、抽象的・人間の労働とともに価値の「本質」——ないし実体規定の一要因とせられるのであって、事実、教授は、「価値がその**実体のうちに**

使用価値をその一般的側面において包摂している」(前掲書九〇ページ、ゴシック——引用者)ことを明言しておられる。^(注1)だがこれは、「使用価値一般」そのものには「客観的な量化の原理」がないことを容認されて、「ポエム

の誤まりは、……それ「使用価値一般」から直接に、価値が導き出されるかのように主張しているところにある」とされた教授自身の立場と相容れない見解だといわなければならない。なぜなら、ここでは教授は明らかに

に、価値を直接に「使用価値一般」から、しかも非実体的なものとしての「使用価値一般」から導出されているからである。^(注2)

(注1) 白杉教授はまた、こうも述べておられる。——「私は、さきに、商品の価値は単に、抽象的人間労働を主体とするものではなくて、その裏側からいえば、同時に、使用価値一般であるというふうな解釈できるのではないかと考えたのであるが、価値の実体規定に関するこの解釈に照応して、その大いさは単に、生産技術の上から商品を生産するのに社会的に必要な労働時間によって決定されるのではなく、それを基礎として同時に、その商品に対する社会的必要からも規定されることをもつと解釈することができないか、そしてそうすることによってマルクスの価値理論は一層大きく生かされてくるのではないかと考えるのである」(前掲書七三ページ、力点は白杉教授、ゴシックは引用者)。

なお、この一文からしてわれわれは、社会的必要労働時間の概念規定の問題をめぐる白杉教授の見解——すなわち「単なる技術説も、単なる需要説も、ともに同様に一面的である」として、「消費説(＝需要説)」をふくんだ技術説の立場」に徹すべきだとする見解(前掲書八三ページ、八五ページ参照)が、「使用価値の捨象」の問題にかんする教授の独自の主張と密接不可分の関連にあることを知ることができよう。ちなみに、社会的必要労働時間の概念規定についての教授のみぎの見解もまた、労働価値説と効用価値説との「真実」の「総合」という教授の基本的な問題意識に由来しているのであって、この点は、たとえば教授が、「商品価値の決定者たる社会的に必要な労働時間が、それ自体のうちに、社会的欲望の契機を包摂していると解釈することができる」とすると、その規定によって、労働価値説のなかに効用価値説の止揚される可能性が包含されているといふことになるであろう」(前掲書九二ページ、ゴシック——引用者)と述べておられることから明らかである。

(注2) しかし白杉教授はある個所で、「私は、価値は有用性の側面から規定されるところがなければならぬと考えるけれども、有用性が労働とやらんで価値の源泉となりうるなど考えるものではない」(前掲書三九ページ)と語っておられる。たしかに教授は、商品の自然的諸属性によって制約された「有用性」——教授の用語でいえば「個別的・具体的な使用価値」——をもって価値の「源泉」だとはされていない。けれども教授にあっては、商品体から切斷されたものとしての「有用性一般」——「使用価値一般」は抽象的・人間的労働とやらんで価値の「源泉」あるいは「実体」をなすものと考えられているのである。

四　む　す　び

上来の考察からしてわれわれは、「使用価値の捨象」および価値の実体規定の問題をめぐる白杉教授の見解はおよそつぎのようなものだとということができようであろう。

白杉教授はまず、『資本論』第一章第一節から一連の文章を引用しながら、「使用価値の捨象」にかんするマルクスの所論をさしあたりそのままの形で採用されるが、この場合には教授は、交換価値の基礎をなす「第三者」あるいは「共通者」が無区別な抽象的・人間的労働の結晶としての価値でなければならぬことを、消極的にはあるが、とにかくも承認される。つまり、この場合には教授はマルクスと同様、商品価値の社会的実体は抽象的・人間的労働だとされるわけである。しかし教授は、つぎに第二に、労働価値説と効用価値説との「真実」の「総合」という問題意識から、「交換関係」において捨象されるのは「個別的・具体的な使用価値」だけであって「一般的・抽象的な使用価値」——「使用価値一般」は捨象されないと解されながら、「交換価値を成立せしめる問題の共通者」には、「その支出の形式には頓着のない人間労働力の支出の単なる凝結」とともに、「い

かなる種類の欲望を充足するかには頓着のない単なる有用性一般」としての「使用価値一般」も包蔵されているはずだと主張される。教授がこのように主張されるさいには、教授は商品価値の实体を一方では抽象的・人間的労働において、他方ではたんなる同質性としての「使用価値一般」において把握されているといつてよい（ただし教授の考えでは、「使用価値一般」は抽象的・人間的労働の「裏側」ないし「裏面」をなすにすぎないのであって、この場合に教授が価値の实体とみなされる二つの要因——抽象的・人間的労働と「使用価値一般」——のうち、第一義的・積極的な意義をもつものは前者の抽象的・人間的労働の方である）。

しかしながら、白杉教授はさらに第三に、「使用価値一般」それ自身には「客観的な量化の原理」がないとの見地から、その「使用価値一般」概念を労働によって実体的に基礎づけようと企てられるのであって、この場合には、教授は、「価値」と「使用価値一般」とをまったく同一視されながら、「問題の共通者」は「価値」＝「使用価値一般」そのもの——あるいは教授特有の表現でいえば「抽象的な経済価値」そのもの——だとされる。そして教授はこの「抽象的な経済価値」の実体的基礎を、あるときはマルクスの「抽象的・人間的労働」に、あるときは「一般的抽象的に有用な人間労働」に、またあるときは「一般的・抽象的に人間の必要に応ずることを目的とした・同質的な形態における人間労働力の支出」としての「労働」に求められる。このばあい「使用価値の捨象」にかんするマルクスの所論が、まえの第二の場合と同じく事実上否定されていることはいうまでもないところであろう。

以上、要するに、「使用価値の捨象」および価値の实体規定の問題をめぐる白杉教授の見解はかならずしも一義的・首尾一貫的なものではないわけである。とりわけ、商品価値の实体についての教授の規定は文字どおり多

元的な性格のものであるということができよう。しかし、これはとりもなおさず、教授が価値の実体規定にさいして少なからず**動揺と混乱**を示しておられることを意味するものにほかならない。そしてそのかぎりでは、効用価値説を労働価値説＝マルクス価値論に「止揚」ないし「包摂」しようとする白杉教授の試みは、遺憾ながら、教授の意図に反して不成功のままに終わっているといわざるをえない。